様式 F-2-2

修士論文要旨

研究テーマ：統合失調症における社会的認知と認知機能リハビリテーション
プログラム Cognitive Activation Therapy（CAT）の効果

学籍番号　1570027

氏　　名　木納　潤一

研究指導教員　　渡邊　和子

研究指導補助教員　坂井　一也

概　要

【背景・目的】

認知機能障害は，統合失調症者の社会機能的転帰に最も関連する因子と捉えられるようになり[1)]，精神科リハビリテーションにおける重要な課題となっている．認知機能障害は陰性症状との関連が指摘されていて，神経認知と社会的認知に分けられる．高野ら[2)]は，神経認知機能に着目し，臨床現場で実施できる認知機能リハビリテーションとして，Cognitive Activation Training by Sport (CATS) を開発し，神経認知の改善効果を報告している．近年は，統合失調症者の社会転帰に関して認知機能障害の社会的認知の重要性が報告されている[3)]ため，本研究では，CATS に社会的認知への重みづけを強化した Cognitive Activation Therapy (CAT) を再構築し，その有効性について検証した．

【対象・方法】

精神科デイケアを利用している統合失調症者で，研究同意の得られた Global Assessment of function（GAF）が 40 点以上の 15 名とした．

研究デザインは介入前後比較とし，CAT の介入を実施しない 6 ヶ月間（介入前群）と，CAT の介入を実施した 6 ヶ月間（介入後群）を比較した．評価項目には①統合失調症簡易認知機能評価尺度（BACS-J），②Wisconsin Card Sorting Test（WCST），③Trail Making Test（TMT A＆B），④Stroop test，⑤Social Cognition Screening Questionnaire（SCSQ），⑥Recovery Assessment Scale（RAS），⑦Life Assessment Scale for Mentally Ill（LASMI），⑧Positive and Negative Syndrome Scale（PANSS），⑨Global Assessment of function（GAF），⑩CAT 満足度アンケートを実施した．陰性症状の安定度と CAT 介入効果についても検証を試みた．

介入は週 2 回で計 50 回実施し，1 回の介入は 40 分間で，オリエンテーション 5 分，実施 25 分，振り返り 10 分とした．CAT の取り組みルールとして，①頭の混乱や失敗を楽しむ，②大きな声と動きで取り組む，③相手を注意深く見るなどコミュニケーションを活性化させるための 8 項目を設定した．CAT 課題には，ボールやお手玉などの道具を用いてペアで実施する 4 種目の基本動作を設定し，これに四肢の動き，指示の変更，認知的課題を個別に追加して多重課題とし，難易度を調整した．課題終了後に“振り返り”を行い，“自分”と“自分から見たペアの相手”の気分・達成度・満足度を振り返りシートに記録し，ペアでお互いに評点をつけた理由を述べ合い，自分がつけた評点とペアの相手がつけた評点を照らし合わせられるよう働きかけた．

統計学的解析にはSPSSv24を用い，有意水準は5%とした．介入前後の比較には，Wilcoxon符号付順位和検定を用い，振り返りシートの記載内容は，KJ法を用いてカテゴリー分類し，CAT介入前期(10～30回)と後期(31～50回)に分け，クロス集計を用いて比較した．

【結果】

入院等の理由から全過程を実施できたのは15名中7名であった．介入前後比較では，RASの全体平均で，「症状に支配されないこと」の項目が有意な差を認めたが(p=0.027)，平均値の大きな改善は認められなかった．他の評価項目においても一部改善傾向を示していたが，有意な変化は認められなかった．CAT満足度アンケートは，5点満点中，平均4.6点と高得点であった．

介入期間中の前期と後期の振り返りシートのカテゴリー別クロス集計結果では，自己表出(p=0.045)，体調(p=0.092)に関する記述割合が後半で有意に増加し，課題全般に関する抽象的記述割合は有意に減少した(p=0.027)．自己満足度では，「取り組む姿勢」等のポジティブな記述割合が増え(p=0.004)，CATの遂行に関するネガティブ記述割合は減少した(p=0.012)．相手の評価に関する項目についての記述割合には，変化は認められなかった．

全体平均では変化が見られない原因として，陰性症状の不安定さが考えられたため，PANSS陰性症状の得点に基づいて，良好群，中間群，不安定群にわけ，陰性症状と介入効果について検証した．良好群では，BACS-Jの初期値は高く，これがさらに改善された．WCSTの初期値が高く，同レベルを維持できていた．RASは「他者への信頼度」が上昇していた．振り返りシートでは，前期からペアを意識した記述ができていた．中間群では，BACS-Jの値が低く，一部に改善が認められ，WCSTは初期値を維持していた．1名を除いて，RASの「他者への信頼度」は上昇し，自分の取り組み方の意識が高まっていた．不安定群では，BACS-Jの値が顕著に低下していた．改善が見られたのはWCSTだけであり，RAS「他者への信頼感」も低下していた．振り返りシートでは，自分の気分について，介入後のカテゴリーが増加した．

【考察】

CATの6ヶ月間50回の介入により，評価結果の全体平均では有意な差は認められなかった．対象者個々のデータでは，評価結果の一部で改善が見られており，CAT介入による改善効果の可能性が考えられた．振り返りシートでは，介入前期と後期とで，“自己表出”や“体調”など自分を意識した記述が増え，情動の平板化の改善や自分の感情理解を改善させた可能性が考えられた．

PANSS陰性症状別群におけるCAT効果の検証では，陰性症状が安定していると認知機能の初期値が高く，他者の感情理解が改善され，社会的認知改善効果が高いことが示された．陰性症状の程度により，認知機能や振り返りの視点やテゴリーに違いが認められ，陰性症状に合わせたCATによる柔軟な対応方法を検討すべきであると考えられた．社会的認知を考慮したCATは，対象者の満足度も高く，有望な社会転帰を目的とした認知機能リハビリテーションプログラムのひとつになりうると考える．今回の研究の限界として，対象者が7名と少なかったため，実施する施設を増やし，より長期間の介入による実証が必要である．

【文献】

1)Green M.F,et al: Cognition in schizophrenia: Past, present, and future.Schizophrenia Research Cognition.1(1)1-9,2014

2)高野隼,他：統合失調症の認知機能改善を目的とした運動プログラムの効果．2015年度星城大学大学院修士論文・特別課題研究論文集，2016

3)池淵恵美,他:統合失調症の社会的認知:脳科学と心理社会的介入の架橋を目指して.精神神経学雑誌,114(5);489-507,2012